

〔「大和文華館の水墨画」展によせて〕

大和文華館蔵「呂洞賓図」の構図と表現—雪村作品の魅力—

道教の仙人として知られる呂洞賓は唐代に実在した人物とされ、本名は呂巖といいます。洞賓は字であり、他に純陽、回道人などと呼ばれます。八仙の一人として民衆の尊崇を集め、金代に成立した道教の一派である全真教では、宗祖の一人とされます。呂洞賓が正史に登場するのは『宋史』からといい、その巻第457「陳搏伝」には、呂洞賓が剣術に巧みなこと、百歳を超えているものの童顔で、僅かの時間で数百里を進む程歩くのが速く、世間の人々が神仙と見なしている、と記述されます。剣術に巧みなことから、彼の姿を描く際には剣が持物として表されます。ネルソン・アトキンス美術館に所蔵される元時代の作例に代表されます(図1)。一方、当館所蔵作例(図2・以下、本図と略称します)をはじめとして、雪村の描く呂洞賓には剣が描かれません。本稿では、本図に見られる構図や表現から、雪村特有の呂洞賓像が生み出される背景を探り、ひいては雪村作品の魅力について考えてみたいと思います。

まずは作品をじっくり観察します。両手を広げ上空を見つめる呂洞賓が描かれます。左手には瓶を、右手には丸い蓋を持ち、口を開けて声を

発しているように見えます。左手の瓶からは、龍が煙のように立ち上り、よく見ると頭部が二つあることに気付きます(図3)。上空には雲の中から表れるように龍が描かれ、呂洞賓と対峙するようです。さらに、足下にも龍が表され、画中に登場する龍の中では最も大きく描かれています。龍の描線に注目しますと、瓶から立ち上る龍には、さらさらとした淡墨が、上空の龍には硬質な細い線が、足下の龍には太くしっかりとした描線が用いられ、その大きさに合わせて描線を変えていることが分かります。このような描線の使い分けから、個々に描かれた龍は別々ではなく、同一の龍の成長過程を表す、異時同図の表現であると理解されます。つまり、呂洞賓は左手の瓶から龍を呼び出し、成長させるという奇跡を起こしているのです。この奇跡を壮大に演出するのが、画中に吹き荒れる風の描写です。風そのもののものは見ることは出来ませんが、長く伸びた顎髭、服の裾、臀部の膨らみによって巧みに表現されます(図4)。ここで注目されるのがそれぞれの方向です。すなわち、顎髭は画面向かって右上、服の裾は左上、臀部の膨らみは下からの風を表します。といった画の中ではどのように風が吹き荒れているのでしょうか。この謎を解く手がかりとなるのが、描き分けられた龍の向きです。画面左手より右上方へ向かう龍は、画面右上で身

体を反転させ(図5)、最後は呂洞賓を持ち上げるように画面下部から浮き上がります。つまり、大きな螺旋状の軌跡を辿ることが出来るのです。龍の大きさを考えますと、かなり奥行きのある画面構成となります。呂洞賓はまさにその中心に立っています。このように見れば矛盾するように見える顎髭や裾の方向も理解されるでしょう。大きな渦の中心、そこにいるのが呂洞賓です。

こうした大気の動きは、顎髭や裾の方向で表現されるだけでなく、余白の部分に施された墨の微妙な階調によっても暗示されます。余白の階調をじっと見ていると、不思議と空気の流れを感じさせ、動いて見えるようになります。この動きが見えてくるにしたがい、画面に精彩が生まれ、活き活きとした作品となります。もちろん当時は動画という概念はありませんが、画面を動かすにはどうすればいいか、雪村の工夫がこうした構図、表現になったと思われます。先行研究では、本図の着想源に南宋や元時代の羅漢図があったことが指摘され、上空で呂洞賓と対峙する龍を、禪道を学んだ師の一人である晦機禪師に見立て、激しい問答を交わしている場面との解釈がなされています(林進「雪村の呂洞賓図について—その主題とモチーフを中心に—」『大和文華』63、1978年)。興味深い解釈ですが、本図を見ると、雪村は絵画の可能性を追求し続けていたことを感じざるを得ません。構図のみならず、表現技法においても、描線の濃淡、スピード、硬さを始め、

多様な描線が認められます。まるで雪村自身が、自らの画技を得意げに示しているかのようです。本図の斬新な画面は、近年では雪村の「奇想」を決定づける作品として、高い評価が与えられています(特別展『雪村奇想の誕生』読売新聞社、2017年)。

最後に、雪村が独創的な絵画を描くことが出来た背景について想像してみます。しばしば言及されるように、雪村はその画技を独学で磨きました。絵画学習の過程で大きな影響を与えたと考えられるのが、小田原・鎌倉での滞在です。北条氏や鎌倉の諸寺院で数多くの中国絵画に接したことが、後の作品の着想源になったことが明らかにされています。型にはまらない一種の自由さは、独学によるものと思われます。一方、本図が生み出される背景には、鑑賞者の存在もあるのではないのでしょうか。すなわち、本図のような斬新な画面を評価する、理解する感覚を持った人々です。本図が雪村の奥州滞在期、70歳代の制作とするならば、1570年代から80年代にかけての時期に当たります。織田信長や豊臣秀吉の活躍期にあたり、時代が大きく動く時期でした。禅僧として激動の時代を生き抜いた雪村は、近世を先取りするような感覚を身につけていったのではないのでしょうか。展示場でじっくりと味わって頂きたい作品です。(古川攝一)

※図1は、海老根聰郎「呂洞賓といわれる画像について—像主の変身—」『美術研究』328、1984年より複写いたしました。



図1



図2

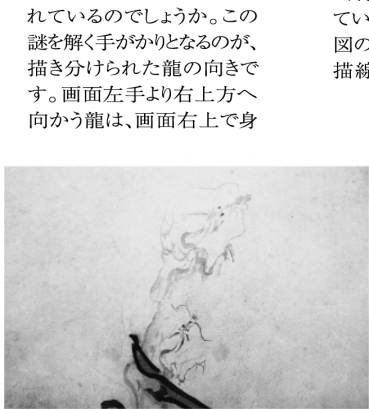


図3



図4

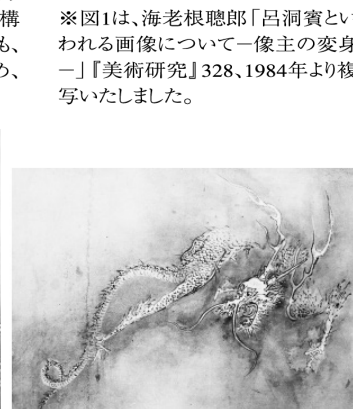


図5